荒川と水にまつわる伝説

微笑ましいものから恐ろしいものまで、多くの伝説が語り継がれています。

宝幢寺境内の河童の石像

秩父市のダイダラボッチ

さいたま市の東浦和駅前に鎮座する見沼の竜神

河川と伝説

河川は私たちの生活に欠かせない水の源です。

最近は河川も整備され、河川の氾濫による水害も少なくなってきましたが、昔は今のように整備されていなかったので、しばしば水害が人々を襲いました。また、あまりにも雨が降らず、人々は雨乞いをしたりしました。

全国あちこちに水にまつわる伝説があります。伝説の数だけ水害が起こっていたり、干上がっているために雨乞いをしていたりしたのかもしれません。河童だったり、龍だったり微笑ましいものから恐ろしいものまで様々ありますので、興味がありましたら調べてみてください。

もしかしたら、新しい発見があるかもしれません。

▶ 志木の河童

昔、柳瀬川には河童がいて、人や馬をよく襲っていました。ある日、寶幢寺の小僧が馬に水浴びをさせるため、馬にまたがって柳瀬川の中に乗り入れたところ、馬が急に驚いて川から飛び出したため、近くの田んぼの中にふり落とされてしまいました。田んぼからはい上がり、馬の後を追いかけ、寺の馬小屋に到着すると、馬が異常に興奮していました。不審に思い、馬の周囲を見ると、10歳くらいの子どものようなかっこうをしたものがいました。小僧が手にからんできたので、すみの方に連れて行って捕まえてみると、それは河童でした。馬にかなり踏まれて弱っているこの河童を馬小屋の外に引きずり出したところ、近所の人々も集まってきて、「柳瀬川で悪さをしているのは、こいつだろう、焼き殺せ」と言って、おおぜいで積み上げた薪に火を付け始めました。河童は自分が焼き殺されることを知って涙を流し、手を合わせて周りの人たちに許しをこいました。寺の和尚もこの様子を見て、河童をあまりにもふびんに思い、人々に命乞いをし、弟子にしてやろうと衣を河童の体にかけました。そして、「今後は、決して人や馬に危害を加えてはいけないよ」と言うと、河童は地面にひれ伏して泣きました。

これを見た人々はかわいそうに思い、河童を川のほとりまで連れて行って放してやると、泣きながら水の中に帰って行きました。翌朝、命を助けてもらったお礼のつもりか、和尚の寝ている枕元に鮒が2匹置いてありました。この後、柳瀬川で人や馬が行方不明になることはなくなったといいます。

▶ 秩父のダイダラボッチ

昔、武蔵野に大太坊という巨人がいて羽黒山に行く途中、秩父の山にさしかかりその時巨人は定峯峠に腰をかけ、かぶっていた笠を笠山の頂におき、両足をニュッと伸ばし槻川のあたりに足をつき粥仁田峠で粥を煮て昼食をとりました。食べ終って粥を煮た釜を伏せたのが釜伏山、二本の箸を立てた所が二本木峠、腰を下ろした石が休石、また荒川の水を含んで吹いたのが大霧山、大太坊の足跡は今でも槻川上流白石の山中にくぼ地や沼として残っているそうです。

▶ 竜宮伝説

鉢形城の内堀として利用された深沢川には、「四十八釜」とよばれるほど数多くの天然の深淵が各所に形成されています。その釜のひとつが「船釜」で、船釜には賽取左衛門の伝説が残っています。

昔、船釜付近に賽取左衛門という人が美しい夫人とともに住んでいました。貧しいながらも幸せに暮らしていた左衛門でしたが、ある日、夫人は、自分は竜宮城の乙姫様の召使で、竜宮城にどうしても帰らなければならないことを左衛門に告げました。左衛門は何とか引きとめようとしましたが、夫人は船釜の奥深く姿を消してしまいました。左衛門はその後を追って船釜に入り、なんとか竜宮城にたどり着くことができました。竜宮城で乙姫様にあい、歓待をうけた左衛門でしたが、郷愁の念が押さえきれず、乙姫様から名剣「水切丸」と阿弥陀像をもらい受け、帰路につきました。亀の子淵までくると、出口は重いふたがかかっていて、どうしても外に出ることができません。そこで左衛門は、手にした水切丸でそのふたを刺してみると、難なくふたが開きました。外に出てみるとあたりは真赤に染まり、大きな亀が息絶えていました。左衛門はお堂を建て、持ち帰った阿弥陀像と水切丸を祀ったと伝えられています。

以上が、船釜と賽取左衛門の伝説で、船釜は現在の溺手橋の下辺りと推定されています。

船釜といわれている淵

アクセス

宝幢寺（志木の河童）

交通：東武東上線「柳瀬川駅」下車、車で約5分

住所：志木市柏町1-10-22

宝幢寺（志木の河童）

出典　環境庁／埼玉県「ダイダラボッチの伝説」看板／寄居町「広報よりい　平成27年7月号」